



梅 日 和

永代美知代



ほがくと暖かい春の日光が肌に心地よい、二月の或る日です。

いま番町の電話局から出て来た壽美代は、薄よごれて、色のあせたやうな、流行おくれの縞天鵞絨の頸巻きを堅くかき合はせると、疲れ切つた眼をうつぶせに、烈しく吹きまくる空つ風をさけて、折々立ちどまりながら、やがて向ふ側の軒端に移ると、招魂社の方角へスタスタ歩いて行きました。

花の盛りに、葉櫻に、そのをり／＼の風情を添えて、ものごゝろついたころからの壽美代のもだ／＼しい心をなぐさめた櫻の枝が、まだ春浅い空に、花も葉もない淋しげな様子なのも、見るからに今日の壽美代にはうら悲しさを感じさせないでは置きませ

んでした。

「お、好い香り！」

思ひ出したやうに見上げると、梅の林は、もうつぼみがほころび初めた。壽美代はベンチに腰かけて、心地よい日向ぼつこに、静かに四周を見廻しました。番町の電話局に交換手として勤める壽美代は、朝に晩につとめの往復りには、いつも定つて、この公園をよこぎる習ひなのでした。ですけれども斯うしてベンチに腰をおろして休んで行くのは、めつたにはないことで、今日は特別、むしろよくしやと思ひになやむ胸を鎮めやうためでした。暫らく休んで居るうちに、壽美代はいつか心も和らいで、いさゝかの疲れを取りかへしたやうに思は

れました。枝から枝へ、ちゝと鳴いては渡る小鳥の
聲を、うつとりと聞き入りました。

「一寸とね、ソラ、アハハハハ」

急に消魂しい笑ひ聲に驚かされて、壽美代が其方
を振り向くと、好もしい色の袴をつけた四五人の女
學生が、何が可笑しいのか、笑ひ崩れ、派手な
友禪もの、被布に着ぶくれながら、思ふ事もなげに
小徑を此方へ參ります。

壽美代は思はず、洗濯物の染飛白の羽織の肩をす
ぼめて、伏眼にならないでは居られませんでした。

「電話交換手！」

自分で云つて、心からの情なさをこめて、われと
我が唇をかみました。

壽美代はうまれながらに、美しくしい黒髪と、勝れ
た容色を持った少女で、身装こそ餘り綺麗ではあり
ませんけれど、染飛白の着物に、海老茶の袴をはい
たところは、一見女學生かとも思はれる程の氣品さ
へ備りました。ですが壽美代は、今の通りがりの

手の仕事着を、相手はちろり、ちろり、嘲るやうに
見据えては、並んで立つた其隣の少女の耳に何事か
を囁きました。

それきり別れてしまつたけれど、それから後の壽
美代の頭は亂れに亂れて、落着いて仕事にかゝつて
ゐる氣にはなれませんでした。

「あゝあ、何と云ふ不仕合せな私だらう？ 女學校
へ行く事も出来ないで、貧しい家の爲め、斯うして
交換手になつたりして働らかなければならん！」
身も疲れ、氣も腐れ切つた壽美代は、午後二時の
退出時間を待ちわびて、殆んど自棄のやうな心地で
外へ出ました。

考へれば考へる程、自分位不仕合せなものはない
やうに思はれて、壽美代は泣いても泣いても足りない
いやうな氣がします。

「泣き度い、泣きたい、泣いて、いつその事泣
き死んでしまひ度い！」

ですが涙は壽美代の悲しい腹を浸し、うるほす事

女學生達から、自分の身の上を見透されて、非常な
侮蔑を與へられたかに感じたのでした。

それもその筈、その日、壽美代のこゝろは、いろ
んな出来ごとで、麻のやうにかき亂されて居りまし
たから。

「今日これから×女學校の生徒達が參觀に來られ
るから、そのつもりで居るやうに」

斯う監督から注意があつたのは、丁度退出前でし
た。

教師に連れられて、ドヤドヤと入つて來た人達は、
みんな美しくしい身装の、如何にも幸福に満ちた
少女ばかりに見えました。

折柄壽美代は目まぐるしく鳴り響く呼び鈴に、夢
中になつて事務をとつてゐましたが、ふと氣がつい
て見ると、參觀の生徒の中に、小學校時代の友達が
ゐる。

「アラ！」

と思つてどきまぎ顔を赦らめた壽美代の顔を、交換

すら致しません、壽美代はたゞ張り切つた悲嘆の胸
を抱いて、何處までも何處までも不幸な我が姿を、
まぎ／＼と見守る外はありませんでした。

「お嬢様、これから本所へ參りますには、如何參つ
たらようござんすでせう？」

見ると、この寒空に破れ袷一枚着た十四五の小娘
が、ねんねこも着せない三つばかりの女の兒を脊負
つて、今一人妹らしい七八つの子供の手を引いて、
疲れ切つた寒げな容子で、わな／＼震へながら壽美
代の傍に立つて居りました。

「本所へ？」 壽美代が驚ろいたやうに訊きかへしま
すと、小娘は力無げに、

「まだ餘程ございますか」

「さうね、でも本所龜澤町行きつて電車へお乗りな
されば、一時間とかゝらないでせう、此處からあの
通りへお出になれば、すぐ電車が通つてます」

壽美代は招魂社外の電車道を指して見せました。
「有り難うござんした。それぢやあの電車道につい

て参ればよろしいので御座いませうか」
小娘は身装のいやしいのにも似ず、案外言葉の綺



麗な、根からの乞食とも思はれませんが。
「アラ、電車道について行ったりしたつて解らないわ。道程が随分あるんですもの」

「……アノ何里ばかり御座いませうか」
「さうね、よくは知りませんが、餘程ありません」

小娘は思ひ悩んだ様子にうつむきました。手を引かれた妹が鼻をすくつて、頻りにむつかり初めました。それをだまし／＼姉は身を揺ぶつて、脊中の子をあやなすのです。

「あなた方は何處からいらつしたの？」

「……私、お嬢様は見兼ねて訊きました。」

「府中の方から参つたので御座います、本所にしるべがあるものですから……」
俯向いたまゝで小娘は答へました。

「府中のおうまれ？」

「いえ、もとは東京なので御座います」

「御両親は？」

「なくなりましてすの、つい此間、二人共一時にねえ、だもんですから私達……」

云ひさしたまゝ、ちつと唇をかみました。

「あの、まことに失禮ですけれど、これで電車にお乗りになつて頂戴」

壽美代は袴の間にはさんだ絹糸の銀貨入れから、貳拾錢玉一つを取り出して、そつと鼻紙につゝんで差出しました。

「いゝえもう」
小娘はさつと顔を赧らめながら、あわてゝ断りました。

「失禮ですけども、どうぞ！」

「でも、それでは餘り……」
繰りかへし断るのでしたが、壽美代から強つてと押しつけられて、小娘は壽美代の親切な情を押し戴きました。

「ではあつかましいやうですけど頂戴致します、お蔭さまでどんなに助かりますか、私は兎に角、妹

達がかあいさうで御座いましてねえ」

幾度となく禮を述べまして、小娘はやがて妹を促して立ち去りました。

壽美代はちつとその後姿を見送りましたが、同情の涙が双頬を傳ふて落ちました。

「世の中には氣の毒なカタがあるものだこと！」

さう思ふと、今の今まで不平に思つた自分の身の上が、案外仕合せなものにも感じられ、貧乏でこそはあれ、まだ其日其日を過し兼ねると云ふでもなく、温かい父母の慈愛に、しつかり抱れて居る幸福さを感じ、しみ／＼身にしみて考へました。

「女學校へ行けなくとも可い、私は私の道を真直ぐに進んで、父様や母様を御安心させなければならぬ……私、私は幸福だ」

壽美代はいそ／＼とベンチを立ちました。
小鳥がちゝと鳴いて、心地よい梅日和です。